鶴亀
玄象
碪
丹後物狂
車僧

五

鶴亀

シテサシ「夫青陽の春になれは四季の節會の事始め
地「不老門にて日月の光を君の叡覧にて
シテ「百官卿相袖をつらね
地「其数一億百餘人
シテ「拝を進むる万戸の声
地「一同に拝する其音は
地「天に響きて夥し

上音同

庭の沙ハ金銀の。玉をつらねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃乃扉。硨磲の行桁瑪瑙の橋。池の汀の鶴亀ハ。蓬莱山もよそならず。君の恵ぞありがたき。いかに

奏聞申べき事乃候。毎年の嘉例乃ごとく。鶴亀を舞せられ。其後月宮殿にて舞楽を奏せられうずるにて候

シテ

亀も角をたかうひて

上地

亀ハ萬年の齢を経。鶴も千代をやかさぬらん

上同

千代の様の数々に。何をひかまし姫小松の。緑の亀も舞遊べば。丹頂の鶴も一千年の齢を君に授け奉り。庭上に参向申けれバ。君も御感の余りにや。舞楽を奏して舞給ふ

キリ上同

月宮殿の白衣の袂の

色こきは花の袖秋は時雨乃楓の紫袖を
さへ行雪の袂をひるがへす衣も薄紫
乃雲の上人の舞楽乃声々に霓裳羽衣
乃曲をかなづれば山河草木国土ゆたかに千代
万代と舞給へば官人駕輿丁御輿をは
やめ君乃よはひも長生殿に君の齢も長
生殿に還御なるこそ目出度けれ

春榮

ワキ 是ハ高橋権頭にて候扨も此度
宇治橋乃合戦に味方打勝捕る
若者を一人生捕りて候是ハ宇都宮乃
中にても春榮殿と申す若き人を生捕
りて候此由を上にて申入候へば預り
誅し申さるべき事にて候間春榮殿

さはよしとよしさりとも海
次第 二人 ちらぬなき
みとせを行く花もや風のちりそめぬ
シテカヽル 是ハ武蔵国の住人増尾太郎種直
て候さても宇治の橋の合戦に弓手にて
射させ其矢をぬきもせで傍に寄退き候
岡が弟に春栄深入して終に生捕
まてこそ候へ生捕仕て候を預
誅せらるべき由にて囚人を預る今や
ことさら此人は春栄のあはれおもひ
ろとり やちとせの都の空は雲井にて遠く羽立
立つ旅衣日も重なりてゆく程に
のぼる伊豆の国府に三嶋の里につき
うつきかよし
シテカヽル 急ぐ程に伊豆の国府に着にけり
急ぐ間此所にて囚人のともかくも高

橋とやらん申候ぞ尋ねて對面申さばやと
存候へ△是てゐがすよ案内申ば囚人なり
何ある高橋殿とは何方より来りて　ヨカヽル何の
御用なるぞ頼たる人の方より参り　上モ是や
苦しからぬ者にて候是は春栄殿の御
方よりの者にて候高橋殿へこれは目に
懸り申さんためにて候是まで参りて候

ござ由をよく〳〵心得有べく候へ　ヨカヽル其
ろへ申は囚人のゆかりの人に堅く禁制
なれども春栄殿のさる方より頼と分別して
通し申されば同じ事にて候へ
暫御待候へ　上モ心得申候　ヨカヽルいかに申候春栄殿
只今ゆかりと申て若き男の参りて候
國より越り度候へ共かやう堅く御禁制

てゐへたゞ長景殿にてさうらへ門下入らく
他ニまれ候申て人何とも景殿のゆう
主の人ども申てまず案ニ対面あるべき由申しけ
彼乃鈴もく関入れ据られ候ニ対面は禁制
ニて候へたゞ長景殿のさゝ事は別して痛いり
申は同ども対面ありけれどもゆるさくはざる
事なれば大法のありしは同太刀かくしおけ

就りくへ最てはいかに申せども何と通すまじ
よつてくかくかくして禁制なりといへども長景殿
乃据られ候事ニ此諸事ニよつて申目ニ
然るをさしかへり候ハ太刀かくしおけ候
主にへ只今申候へ寄せて久しく長景殿
乃ゆうかり候ハ高橋別して痛まり申
関対面申ありけるは申されば長景なる大法

みし程よかゝる刀禁制の由にて候へは シテ
たち刀をもとりまいらせつ ワキ 春栄殿の御為
には何にて渡り候そ シテ さん候是には
ワキ 是ハ春栄殿の為には何にて渡り候そ シテ 是ハ
春栄か兄にて候増尾の太郎種直と申者
にて候か今度宇治橋の合戦に弓手の
肩先を射させ矢をもぬかて此傍に引退
き候間に常ありて春栄深入して生捕れて
候所か何方へ捨られ候はゝ某も一所に誅
せられん為に遥々是まて参りて候春栄
に対面させ給ひ候へ ワキ 委細承候
先それにて御待候へ此由申候
春栄殿へ申候へは種直か御参候 シテ 心得申候
ワキ いかに春栄殿へ申候唯今御舎兄の御参

たね乃太郎種直といひし者有て是に近御
ちかくしゑて御対面候へ「是ハ滅しから
いはゞ兄にて候かの宇治橋乃合戦にて生
手おひしか命不定と存候つるに「いか
すきやまさしくは舎兄と存候にめでたき
御迎乃為にはるばる是まで御出候へ「不思議
なりけり「譜代の者にて家人のみならず一(ン)曲

おはしまして給はり候へ「偽なき家人の申
かざらは随分しか候はゞいかにこれらの
人なれば候はゞ「是までの
申て只ひたすら御身の隠れにて死ぬべし
なるべし譜代の侍の家人もちまじき
き随分申させ給ひて申さで
御命を申して「指(?)て候事ぞ

めし出されし人〻にかゝらせて見と
なら某二所に誘されまいらせ候へといひ候は
みえし御沙汰ならびに引合せられ給ひ
候へば某射向にて家人の先の勝負を定
申しつ　早く宮と見まゐらせ候はゞ
たゞいま呼出しつゝ左射付け袖にする
御手にて妻戸の口を御覧じ候へ

御申候へし　早くいくにはま栄殿に申候へと
入来り給はるくとて出でゝ御はまあり
然者其の中綱に便よき間ずいぶん
そこ御領を此方へ渡し候べしといくにはま栄行
某をば家へて申して扨て此度ら檜
の合戦に手の扇を射させ矢を抜
と非傍に先き退き御まいらせ深く

生捕まゐりて候條内にても見廻されけれ
は家人と云て争ふかたも恥しう社務
ありつる所に社務の為に思召し給ひて
はや此たびは右様に申ていつかは
かの三世乃ようしと思ふ墨を遣してありた
る忘れ侍らせ申もやさしきたまはる
に候申し毎に申つけて上に社務を

我ものへ浮ぶまわりに社務の人
きれと能く申し給へ狩りを家人と言ふか浮山ま
乃ちに物とて見えて申し候へ様へ取て顕すこと
たうとび家人かくて五代儀に隠すとも
あし……時とえて早くもとうき夏この
……………………………………………
ちぢに求めて候へく………
春の山清を見る桜にも松の

らぬみなりかし
〽一子年にもたらざる童
よはまうし隠れくなりしを 〽是をいかにと
もし我殿にやうらへ父をうらみ 〽さればこそ
いかに酔る夢のうらみ 〽今は力なき勇力も主命は
親は法師となりて家を主として 〽是は浮世羅漢の
きれは 〽誠なるかなさむらひの習ひ也 〽いやとかく
主命を捨るは種も是非なく腹きらんや

かゝるしるしをつげば幸にわかれと行へ
〽たのみ給へ 誰かはいかにも命をたがへと申すまじきを
さらばおのゝ家人として作まじき忠を尽さんよはひなり
けふはわが身の親をば行前の御前にて名残 真をも
忠義をこそ因は守護の兵をだにもひかへ
思ひの思ひやりぞ是へきの兄弟也とて老年
我をたのみしかとや 〽言語道断の次第

兄弟なれば四子どもを感し申ず神妙也菅原
信りてけれバ仁種直よりハ某ず兵衛殿を
痛つけり事ゆめ弟よりも某子共を大持
てゐもを宇治橋乃合戦ようにせられ候り
ばせ兵衛殿のはたをりけるもたらなれ共向
天膝の命を助けられつゝず某ようき
後跡をつきを申候この大事なれハやがて行

やかしとて且く城へそ有りが参行たちかやがてと
申候うちも待ちてよし鎌倉より早
よりこをとば箱根をこされよ肉入を皆
誅しとをに出されなば痛りちかう
力ありこそけれ兵衛殿もお守護の此国者
とおさ申させ候へば まつい種直殿
もつへ旧郷へ帰りたへに 打ゆばず兵衛の力

ゑ幼き者乃ことなれハ同じく春栄をも助き事
を誅して給り候へ ワキ 何かと申候へ乃
ぞや目録に付けめたし候へバ同じく叶
ひ申まじく候 シテ 仰はさる事にて候へども
私を始めて春栄を助け参らせて給
はり候へ ワキ 是ハ思ひよらぬ仰にて候
我が身補ふ シテ 御身の力に合きれ迄

さあらく参り候ひしが春栄乃命をを
見捨て帰る事ハ有まじき仍同じ事をも
一所に誅して給はり候へ ワキ さればとてもかくな
なく シテ いかに春栄古里へ筆を贈り候へ
がすまかた郎ハ故への国に帰り母御に申
候ハんやハ春栄乃家度乃形見に
見よとて預く候得ば扨ハ誅さるる事を

ばかり成けるにこそ みるひとは打寄りてかきくどき
申けるへ 思ひ成 成守らせ給ふ母は北の方より
給ひけりたるが もとも仏の観世音菩薩の直なる事に
御形見と縺て申しへ 是なる文は
栄ふ栄枯の人のみぞかしこかりしが
烏羽玉の御ぐしも髪の ちぎりもさきつかた
ばかりの月影も思ひも節と思ひて

形見と見し黒髪をば 栄のかたみと思ひまいらせ
まいらせて おもひ宮あちこちも秘して
残りては跡を弔ふ よすがもなく
て成人の子を残しおきて 歎き給ふ
母上の御心のうち 思ひやられて哀れなる
ものや 宮やまいまだ幼き
が父母を慕ひまゐらする 必ず一世は限りある

もと世々に父母乃種くなかりしこれ
十二因縁より二十五有乃流転して
ある所にきてハまた流轉にめくるなり
すくれ親子情深くもみをまもり他
あらん
「然るに羊鹿牛車よのまえに次
宅乃さかひを出ゝて煩悩菩提乃
三門の縄よ繫まれまつるゝけれはよ

久遠劫より流轉して人間界よ生まるゝれし
ばつ乃らしひ離きし去因果経を
せましみよ煉乃報殺の縁たゝ八車輪
のちらぬば神人を去つ人のなれたまへのうちを
宮まさし無ゝさ生涯らしひ去れ海よう流
又らくは法の舟橋をまうちきかつう
かるらきのほさら此生から神国と云あらう

夫佛法流布乃時剋への法もさかりなり
然るに南無あつまるは法東漸のつとめ
有明の月影つゝむ人界いそぐ
是迎乃夜入る仏拝清えみ弥陀の国
然ども道あらハ心の浄土なり
知りこゝろをかけ頼もしき庵
日
家ハ東路乃末をさし伊豆乃国

南無や三嶋乃明神本地大通智勝仏
過去塵点のそのかみより黄泉中有の
旅乃空長闇冥界落とも救ひ給ふ
志ふかくそ祈りを申されける
その指てたゞ二度袖をしぼりけん
ハヤ
いつに高橋殿鐘をならし早うちせ
将は何ゆへとよ
早打
是ハ又早打来れ

番を致しまゐらする所はいや若宮より
當番の申しによりて囚人七人の受取りまゐり
ワキ
〽さては春栄殿も〽七人のうちか　ワキ〽なかなか
さりながら讀み付けし若党別當の尉にて
より囚人七人受取りの中に第一番にある
別當の囚人には弟豊前の尉なる司第二番に
ある者は次郎が弟二十歳ばかりの増尾の尉

春栄丸誠りにて候へども讀みて見さう申や
上
助けて春栄を　大刀の下よりも
たとひ命助かるとも甲斐なき
思ひの中の數の雲の上
さまにて地してやすら情の種き哉
ようこそ社城の良あらまほしけれ　ワキ〽いかに種直
よ申す御前もよくよく春栄殿の

千天晴る文命も助まいらせ給へと言葉を
一弘も続き声もろとも人々数計ひとしく上
り給ひけり シテ 宮比には参るもめでつ 下 音
羽更衣吉日吉す見る家に伝はる重代
乃太刀とぞ云ふ宝剣なり 上カカル 宮まで千秋万歳
上詞
是は指ひの盃の数も日も千や鶴が岡
伊豆の三嶋乃神風も吹きまさる千代の
末

初めも歳々つきせぬ限りや栄家辰今日と八
此時を云ふめでたさの猶も盃の数
為る酒には云ふ宝剣も指を立て親と子の宝
めでたきよ祝言の千秋万歳の舞の袖翻し
シテ上ゲ まことや千や代のやちよをさそふ松の いくよ
心は万歳楽 いろいろ猶直ぐ月も盃打まはし
一指も舞ふ人 シテ 更にこそ舞ひ奏でまする 上同 祝ひ

上歌 同
心は万歳楽東路の梅の花も咲ければ春栄の
千世の陰そふ若緑若緑の松の緑の孝行も
若緑 地 言ふやうも竹の親子の睦び兄弟
かまへて云事を云行までもむつまじき親子
兄弟と栄ふる御世の恵みも是ぞ孝行を守り給ふ三
島の宮居の利生とて伏し拝みて親子兄弟打連
まづ打つれて鎌倉へこそ急ぎけれ

砧

ワキ詞「是は九州芦屋の何某にて候我訴
訟のあるにより在京仕て候仮初の
在京と存候へ共当年三とせになりて候
余りに旧郷の事心もとなく候程に
召つかひ候夕霧と申女を下さばやと
思ひ候いかに夕霧余りに古里

心もとなくは程もなく下り候へし
此年の暮には必下るへき由申候て下し
ツレ詞 さらは急き下り候へし必此暮には
御下りあるへき由申候へ 上歌 此程の
旅の衣日も添ひて幾夕暮の
宮こならん夢も数そふ枕あり
かくして程もなく芦屋の里に着にけり

急候程に芦屋の里に着て候
軈て案内を申さはやと思ひ候いかに案
内申候都より夕霧か参りたる由御申候へ
シテサシ それ鴛鴦の衾の下には立去る思ひを
悲しひ比目の枕の上には波を隔つる
うれひありましてや深き妹背の中同
し世をたに忍ふ草我はしのはぬ涙とお

まくる袖に絹まくる涙の雨ぞ晴間稀なる心の秋 ツレ詞「夕霧が参りたる由御申候へ シテ詞「何夕霧と申か人遣もあるに此方へ来り候へいかに夕霧めづらしながら恨めしや人こそ変り果てぬると風の行末の便りにもおとづれやらぬ情なきぞ ツレ上「さん候疾くにも参りたく候ひしかども

御宮つかひの隙もなくて心よりほかに三年迄都に候ひつる シテ上「何都の なとか心のほとこそや思ひ寄なき都の
下 花盛すぐ時におもひ折をよそう ぞさいはひたれなきひそ 下音 都の住居に秋も来べき人目も草も枯れ 下 契りも絶えてぬ何と頼まん身の末

ゆく急ウ 上ヲ 三年の秋の夢ならばう

きハそのまゝさめもせで思ひ出てハ

身に残り昔ハかハり跡もなし

やいつはりのなき世なりけるを

たまさかの契りしうらみの心やむ

ちろゝに鳴きよる虫のこゑみだれ シテ詞 荒ふし

ぎや何やらんあなたにあたつて物音の

きこえ候あれハ何にて候ぞ ツレ詞 あれハ

里人の砧うつ音にて候 シテ げにや我

身のうきまゝに古事の思ひ出られて

候ぞや唐土に蘇武といひし人

胡国とやらんに捨てられしに故

郷にとめおきし妻や子が夜寒の寝覚

を思ひやり高楼に上りて砧をうつ

志乃末通りけるか萬里の外なる
蘇武か旅寝に故郷の砧聞えしとなり
下 わらはも思ひや慰むとさびしき
くれはとりあやの衣砧にうちて心
をもなぐさまばやと思ひ候　ツレ詞 いや砧
などは賤しき者のわざにてこそ候へ
去ながら御心慰めんためならば

砧をこしらへてまいらせ候べし
シテ上 いさ〳〵砧うたんとてなれてふす猪
乃床の上　ツレ上 なみだ方しきさむしろに
シテ 思ひをのぶる便ぞと　ツレ 夕霧立より
あひそろひつゝ　シテ うらみの砧　ツレ 打
つとかや　衣に落る松乃声　衣に
下 おちて松の音夜寒を風やしらすらん

音信はまれなる中の秋風に
うきをしらする夕へかな　遠里
人もなかむらん　たか世と月はよもとはし
面白の折からや　ころしも
秋の夕つかた　をしかの声も心
すごく　見ぬ山風をおくりきて　梢は
いつれ一葉ちる　空すさましき月

影の軒のしのぶにうつろひて　露の玉
たまたれかゝる身の　思ひをのぶる夜
すから　宮漏高く立て　風北に
めくり　隣砧ゆるく急にして
月西に流る　蘇武か旅寝は北の国
是は東の空なれは　西よりくる秋の
風の吹おくれと　まとをの衣うたうよ

上シテ
篁卿の行端の松を心もちよせの
さゝくれは嵐の音を頼みとぞすなる今
其磯の拝をへて君の名所はよみまさ
やう物絹のよ吹て松風よけの心有て
人よりさきはすゞの音を聴くが中宿
夜はひころも重ねの衣もそゞろ舞ふよ
まてそよすゞ浪の逢をも哀も聞ゆれ

うらめしの夏衣うすき契りはいまはしや
君が命はながき夜の月にはとても
ねられぬにいさく衣うたうよ彼織女
の契りは一夜はかりのかり衣
天の河なみ立隔てあふせかひなき甲斐
なき浮舟の梶の葉もろき露なみだ
ふたつの袖やしほるらん水かげ草ならは

上ゲテ

すはうらうきやうしうた　文月
七日のあかつきや八月九月げにまさに
長き夜千声万声のうきを人に
しらせばや月の色風のけしき影に
をく霜迄も心すごき折節に砧
のをと夜あらしかなしみの声虫の音
まじりておつる露涙ぼろ〳〵
はら〳〵といづれ砧の音やらん

ツレ詞

いかに申候都より人参り
て候さては此年の暮にも御下り
有まじきにて候

シテ下

恨めしや責ては年の暮をこそ偽り
ながら待つるに扨は誠にかはり果
給ふぞや　思はじと思ふも心を…

うな色も枯野の山のはらの乱れて
草の花ちる風折したる心地して
露ま思ひ寐に伏しづみよしく
ぬまよきつまもく　むさしやお三年を
ぬる夜ともことじつまみしつま琴
のはかれの別れとも思はぬや
さきの世の悔の八千度もよまうくれ

陰あるとも二河ゆりける道とゆかまま
梓の弓のうらはずを声をかへ次
あられはよく　三瀬川沈み果
みつゝのみの善ちのあさかれの続
うれひやうむくわの光をならべては
娑婆の春をあらはし　一のとの志る色
の灯は真如の秋の月をみとらするう

我ハ邪婬乃業ふかき思ひのけむり乃
立居だに安からざりし報ひ罪の
乱るゝ心のいとまなくごくそつあはう
羅刹乃笞乃数の隙もなくうてや
うて屋と報ひの砧うらめしかりける
因果乃妄執
因果乃まうしうの思ひ
思ひの泪砧にかゝれバ泪ハかへりて

火焔となつて胸の煙のほのほにむせべば
さけべど声が出ばこそ砧も音なく
松風もきこえず呵責の声のみおそろし
ろや羊あゆみ隙の駒
うつりゆくなる六つ乃道因果の小車の
火宅の門を出ざれバめぐり巡れ
生死乃海ハ離るまじやあぢきなの

うらみは葛の葉のうらみは葛の葉の
かへりかねて執心の面影のはづかしや
思ひ妻の二世と契りても猶末の
松山千代迄とかけし頼みはあだ波の
あらよしなのそらごとやそもかゝる人の心か
烏てふ大をそ鳥も心して
うつし人とハ誰かいふ草木も時
を知り鳥獣も心ありやげにまことたとへつる
そぶは旅雁に文をつけ
萬里の南國に至りしも契りの深き
志浅からざりし故ぞかし君いかな
れば旅枕夜寒の衣うつゝとも
夢ともせめてなど思ひしらずや
うらめしや法華讀誦の力にて

幽霊まさに成仏の道明らかよ
成にけり是も思へバ仮初よ
碁乃声のうちひらくる法乃花心
菩提乃種と成にけり

丹後物狂

是ハ丹後国白糸乃濱よ岩井乃何
某とや申者にて候我いまだ子を持
たざりし程に橋立乃文殊よ一ッ七日参籠り
祈誓仕りて候へバ有夜霊夢よ松の
枝よ花を添て給はると見てほと
なく男子をまうけて候へバ霊夢よ

住せ君とも花妻と付やてはゞ文学
岡乃為ばかりちらさの成相寺と
や山寺よと預置てはゞ久却対面を
まい雅よ寺よりよゐてはゞ洪方
へ呼出し学文書様とも手も平し
なげいゝに詣て有 法前よい花松
をちより呼戻し預とやつまうり

て有つ ご心はちやり夕部是へはかりみまうし
何とて楽るはやさねそ 夕べ〳〵はあ
気よは夜つる方が梅戸へ入はは 実を
夕部はちとも酔て何よはは花松を
母へよひ〳〵へ 畏てはぐいつよ花妻殿
はぐ前へはて参りはへ 久却見はうの預は
披群よ成人まつくはゞいつよ花松殿を

寺より呼にくる侍のはよあらは
学文をはあらんかうけきまなひて
我学文の奥義を極め經一部聖教
やよみも哥道の双紙八代集習ひ
覚へていだし法花をはかりしれ
又内典の外倶舎論のうちも七巻まて
覚へまらし
是ハ猶もあまた覚へて候
又花松か学文のるすハやよみにおよこ
さとりあるよ何事か能のある
ほう中のちかきけ上手なりし
やあ
かしまそれハ女か子のるなりてある
いや花松乃はかみなり
是ハ誠か
やあをれ悪心をさかやて[?]へまい
児の能をは哥連歌のるなりやよみをは

鞠小弓なとゝハ子細なけれともあり
ちらなとやう力ハ鉾のことくなく
ならひ京なとへ参りなから狂人
学文のやうを尋ぬる事に法花経は
ハ法師品又俱舎論のうち七巻迄
ぬと覚ゆるは候ハゝやうなちう参候は
なとも七巻なとは見ゆねといやしき茶

おほき物ハ示あるくなし趣しるく一日より
ハ年のうちなくハ有ましひそしとよ念
さてと狂いやくえ猿立はましき事
猿の立よまるよし　猿ニ行まて道
とまちくしく猿の古里よゆらん
加様よい者へ猿楽彦山参り掛廉に住
居住る者なれとも又其よ仏弟子は方便

我一とせ丹後國よりはるばる天
橋立乃浦にはふねをあけさせ給ひて
其上さまはけや筑紫よりで彦山
に預置候處に利根第一之人
みらく今は学文之奥儀をも極めし
又ある日之つれ〳〵に我ハ丹後の國
白糸之濱に岩井の何某とかや人

之呂ひとり子にてはありしが一の中より
乃子細より出生にてりしが今一夜も
國に留りし父母乃ハ行衛をも尋あり
夜を使られは猶に我まは紙や唯今
丹後の國白糸之濱へと急ぎしが今さらく
乃は猶よく〳〵父母には對面ある
へくゆるは心安く急行くよまちあると

日をかさねて気は君が程なる白髪の
嫁に来てば是に婿は侍へ父これ
は在所をも出てはまつさまつる事は
びんぎに此所あまり君人のまよりなか
詞にし渡りけりそ　此所に岩井なと
や人君は器なき　さんけ此所は岩井殿
乃は在所にかくはへ九玄るにありて

今は夫婦ともに此所に住は器なくは　器
は何ともしるかうりそ　一子を失
ひまた嫁ともに行かうき知らずもとは
言語乃ゆうの入ありし　びうまや作ば岩井
原君と見とこしの申てたびば夫婦ともに
此所にはは住家にようしや作ば実く御
旅涯むかしより土つゝみ父母乃は墓

に此文殊堂にて一七日は説法あるに
まゐりし君いまに此世に法有て
は違候とも成ゑし思ひては説法
をいつまで此あたりの人々貴き知
識者文殊堂にて一七日は説法は
そゞ皆々はしまりあへ物に狂ひ立
随縁故縁者さはきさしと見へたり若乃

縁は弓はつるをとくあるもすゑにまうて
おりしもを今はなかなかき咲乱たる
花衣おりはすみにさまはとも名にの
けさきなりけりうつろふとこの世は花
のあれはるうら理しかも花ひらく
おもひそめにし年月のむくひ十四五計成
見や違ひ行はひし何かれへきを

見へぬとや意ぬしきや我子共花松ハ
孝子を凡人へも里にもなし捨いつへ
行ていそおもゝ何ともあやまりて
親乃子を思ふ程うくれなる者ハ
ゆきし我子乃花雲を寺より呼り
学問乃様を尋ねしよぎん土安を
文く習えへるとや父か悦ぶ共此

力ありきよしあき志のゆひておの
ちこ社は経安ちち共上一年と
や見の経まさし安ちちとやっ
ちと心よういりておちくと志つり
てえはおさか心にそし意なさけなや
ざまく寺よりかりうるねをとしお
りひ父を恨ミ此橋立の海よ身を

あくる酔さめてもとくさら〳〵行て
さりとも前世の事をやむひとさ
みても見ればかく加様に柱ひめくらね
其時はうかうかしかうかうか川
ちゝもじは我子君うつゝと思へば
おかしきよそはへとよ菩我子哀
しやあ我子しいしやば文殊堂

まて説法の有しかばそとうまりて
ちやうもんしはぢん志をらく拍人は
てあらば説法のまへへ叶はまいさそ
何を聞もうへ元抛柱を思ふ節目と
しかめんへば説法の間は拍ひなまり
さらば其所にて静にちやうもんし
はへいつにしばせやさらとく聴衆を

しまりてのぞ思ひてば説法をはじめ
あらはされし後は時剋を延し
うはゞ等師らるにありて發願者
うなうちあらしばらしく敬白一代教文
至釈迦牟尼寶号三世諸佛。
十方乃薩埵にてまうさく懇誠
命よの阿弥陀仏名
阿弥陀南無

阿弥陀の弥陀南無阿弥陀仏と称
ひあうりて本誓遠縁かとうきまん
阿弥陀は記らるゝましきこしつるぞ称す
て説法乃座都をさかりと海ひて
ずぐれ思はる事をあげなる地様ひに
そあげきし
何ありよつとあげある
われらひとや母そよ用そなげある

おもひよらぬ面白しくおもふてまゐる

らんとせしかおもひありて思ふ事

あしとは汝ちにしよし奇り

あしよ事をありて世にまはよかの

海老夫の播立部ありせは部より

とりは左中将の筆の跡をとりお

能寄し我まきも子君とをうひよや。

南無阿弥陀仏いつよき人我まもそ子乃

帰ひとりの寺師君は耳にさそり

てはちえ狂人のわかのいふへとりかへ

其後寺師は時のいふへと因縁説

法はなりてありて世界らまうさる

いくあらそて急て地祇の山へ

親の子をおりよすへ浄よかくさゝは

やがてきこすよう者宮腹ぞかし
のぼらせめよ至るまでまちくぞ子故命を
ぜひもなし我までもりしは此国のを
きあてりよ傳へありけるさし悪ム
あと海ぞ子者あさき事を歎きみ
は太平るよいのりをうけびとらぬ男子
をまゐる浅くおあのく子なれ

はかざりぬ花をおちて綿者の袖の
うへのきんけしず云ふるひあさきあまり
みづくまさりまきりけのはさるまかん
たうせへべりれそ狂乱の婚姻なる
子は胡あき心ばいさわざを及忠
風識よにくむそしころへだよまうる
きらく家を出かの橋立にうちやうり

浦乃波写に身をなぐる父母後悔
ちかくもちぐさかそうられる姿をば
おだんもやし思ひてぢてし所を尋
ぬきれうさ汲写に言て紅
をなしぎもひ乃はやに心定よあ
くらまて狂人とかねつけは髪婦
た家をも出し出てまよりて尋ねけるを

其西敷乃あけまいとしは家古里
まに二度立ゆりて中橋立にまよりも
ふりめ其法本尊やなとに緣乃
あきの子をだにしもよそひの我とも哉
ものかさし文殊に向ひて恨みこちて
ぜひもちや夫の三河そきう所に所
とあけて浄出乃緣とかなんと思ひ切

さる程に此法師をはつきみんて程なきに
とひてとひける人いつまでさふらふへきと思ひて
因縁説法をはのべわかちまゐらせし為
聞乃うち白象乃浪に岩井乃何某と
申人のかひひとりの一人乃子を持ちて学
文ようしとて勘当せられ程に父を
恨み此海に身をなげしを拾翁

紫舟乃船以元上於紫まうり高山に登り
学問の奥義を極めて又紫山に帰りて
とへば父母の行方ならひとた程に親乃
為に七日の説法をのべ其ほどすぎてあけ
しかるべしとて七日きりける法師が身
のうへにては我れも我子の花松といふ
なしくへ思へ人婆よもちてかなひ

然く乃至六面羅乃其いりをさる
八多方の上をこおきまいあれは我ろ
文珠所なる宝面羅乃花にわうとしてさ
きおてそこれなる梅あるさまは
さきへし我古里に立つれども
とくまさるものかはもなへにたち立
乃犬殿文殊乃利生と

くるま僧

憂乃世をめぐる車僧くるま乃眠
りさまして所雲ふるゝ小倉のを
嵯峨乃宮くちるや秋野の嵐山
瀧のひゞきを身にそへて重ねる雲の
大井川つゞく乃廣のさの櫻ならひとを
袖も白妙の雪をしをれかゝる暮日去れ。

西山に奥ふかく嵯峨野に車
をとゞめて四方の景色を詠めあまれ
おくれめずに車僧　何事も
うき世をすてゝ　浮雲の　うき世とぞ
何とかかれらに車僧とはのゝしるらん
とかくみき　うき世をそむきぬる
も車僧のりものゝへだてがあるこそ

業もうるへきつかつく往ときみるこそ
くるたりぬ涼し　かぜめでたき嵯峨の
山よりいづる　人あることのありね
まなむか　法華僧乃まみえ　一両
不住　車の入所　火宅の出車
めぐらるれ　光るは　をとめとも
半守　にしくも　ひきまはね　車僧

上音 夫三界無安猶如火宅とハいへど
もこゝろ乃車僧が邪めぐるをとめ
道ありきとあるのり得たりく
上音 たゞよへ心空なる雲水ぞくぐる
行そらも冷じき嵐を声として行ば
て山路とよむ道ありきあひく車路
をもかれとしげりをむかひゐあらて

やま太郎坊の庵室ぶ御へあまりやく
るま僧と能ありて又山の黒雲よ
愛宕あたりをおくり 愛宕山
むさみるに雪粉の蕭つむ人共
法まよ見えり宮と中より山路を
搦車輪ハ尽に車僧が我頭をさしの
あしと帰心の心路あとあるらしや

なるハ世も末法欲心ふかうし猶ふかく
彼僧魔道にも心をよせよと車僧
地　善悪二つる輪乃ごとく　シテ　仏法の
世法あり　地　煩悩あれバ菩提
あり　シテ　佛あれバ衆生もあり
地　車僧あれバ　シテ　太郎坊乃行者もあり
上　ワキ　行ふ行ひ行へ行きれ行徳を行る

まつよく〳〵ハ此車僧行くへき事
ワキ　いつに世ありすたるとも乗れはよし
シテ　うきそう我ハもとより不増不滅
おもし面白乃時節やな　シテ　実おもしろ
きゝ附花まうけ雪乃中にくる風をさめ
あらしけりつゝ思ひよくいざ静まれ
ワキ　あそひ遊へいとゆふ乃我心をれひ

つきしめや　おとかはひろく首へきと
荒きをかゝる車をかけり　あの車を
うたれ行やらんの牛をもうけいつへりや
きれいく車はころ縁をすゝ掛うしか
うるむも、かうらいて葉　愚や世に
牛の首にてえたるうしをいおとさる
みえたる牛とは掛つるこゝも心牛は

うけをもゆり　かくておおき僧みさうらへ
をくへきいら　中くかゝずてくおらふ
露地の白牛とうけて見えさせ給子
をあそらく虚空をかけて、あき縁や
おもしらの厳のかくゆら出らうて
今ここにこそよく車とみえつる牛も
なく人をひらかぬよ至まいくとゆかう無

てかゝる車にのりながら小車
の山のうちの聖は道をとうば法のみち
の遊行して最勝は利益すると
こや形の寡は字世の勝識を見
や雲はかゝるみち滞かゝる車のるい
ち八足ひきの大雲かようゆり
愛宕山の道あうとは法のくるる安路

たいらかな　ゆくうおきのかけ息去
上地 掌は小くる夜雨そくさやすてども
ゆくは 地 きぬ事しいとふ山　洲車乃
下地 法のからく勝識小金犬并あふし
乃げ山門をどひうきりくやきしまくす
まともおさうへ了秋まじく寄持
は車僧の那ありがたう貴やありがたうやと

魔障をやつさ大天狗ハ今當年忠
てうらちあまされ

右之本者觀世左大夫織部以章句眞本今亦新令改版者也

寛政十一巳未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛